

やす子さん（仮名・52才）が誕生日だという。「おめでとうございます。何才になったの？」彼女の答えは、この数十年ちっとも変わらない。決まって「20才」だ。こんな時に、「20才じゃないでしょ、確か50才くらいだと思うんだけど…」なんて会話は、彼女の感情をひどく傷つける。「本当にこの人はイヤらしい。私のことをおばあちゃん扱いして、もう二度と口をきいてやらん」、けんもほろろの対応だ。

やす子さんのことを<知的障がい者>で<自分の年齢が分からない人>と考えたと実はこうなってしまう。<知的障がい者>であることも<算数が苦手な人>ということ、ちょっと頭の片隅に寄せて会話を進めると、実は新しい発見がある。そして、そんな会話の進め方が私は大好きだ。

「そうか、20才なんだ…、オシャレなものね」

彼女は、このところ本当にいろいろな服を買い込んで、まるで20代の女の子のように着飾っている。

「あたし、前はなあ、オシャレをしたくてもできんかったんな…。髪の毛も長くできんかったし、染めることもできんかったし、スカートだってはけんかったんな…。できるようになって本当によかった。お化粧だって自由だしね。あたし、美人だら？」「今が一番幸せな。これからずっと長生きするんな。行きたいところもいっぱいあるしな…」

20才、それは彼女の心の年齢なのだ。彼女の中学校卒業以降の人生は壮絶だ。住み込みの就職、過酷な工場の仕事、心にかかる負荷と心の病、施設入所、さらには、リハビリテーションという名の訓練…、彼女の心の時計は、20才で止まっているのだ。夢と希望に満ちているは

ずの20代、その夢と希望が果たせなかった人生遍歴を前に、彼女は心の時計を20才で止めたのだ。

そして今、彼女の心の時計はゆっくり動き始めている。失われた30年をゆっくり取り戻しているかのようだ。オシャレはもちろん、毎年欠かさないお墓参りで亡き父との会話、衰えた母との母の日などを通じた気遣いのやりとり等、全てが彼女の今まで成すことができなかった自己選択と自己決定を中心に進められている。

そういえば、数年前には、彼女はウェディングドレスを着て、写真館で写真を撮った。昨年は、「飯田動物園」をクラス旅行先に選び—通常は小グループで出かける旅行スタイルだが、彼女は担任職員との一対一の旅行スタイルを希望した—、今年度のクラス旅行先は「天竜舟下り」を選択している。今までの人生の、特に青春時代のぽっかり空いたパズルの一片一片を一つ一つ埋めていっているような作業だ。今彼女は人生をネガティブ色からポジティブ色に塗り直そうとしている。

そして、今彼女は、60才。最近は、年齢を聞いても、もう20才とは言わない。心の年齢が前に進み始めているからだ。